

文体と Linguistics

——Linguistics は文体研究に何を寄与し得るか——

東 山 節 子

§. 言語美学としての文体研究

近代の文体研究は修辞学にみられたような「規則性」の科学とは全く違い事実の科学という方向をとっている。それは直接には 19 世紀の言語学から生れている。今世紀の始め文体は、語学的見地よりはむしろ文学論に近い方法で研究されていたが、言語美学、言語学の分野にもまたがり、現在 Linguistics が試みている文体研究と全く断絶するものでもなかった。20 世紀の前半に、歴史家であり、美学者であり、哲学者であり、又文芸評論家でもあったイタリアの Benedetto Croce はことばと表現は同じでありその表現を研究するのは美学の仕事であるから、美学と言語学は同じ現象を扱うものであると主張した。こうなると言語はばらばらの要素に分析できる対象物ではなく個人の創作物であるから、創作者との関連に於いて文体研究もなされるべきだと考えられた。Buffon の有名な 'Le style est l'homme même' である¹。

この影響をうけたドイツの言語学者で後にナチに追われ、アメリカに渡った Leo Spitzer は文学作品の文体特徴の研究を土台とする批評を創り上げた。彼は全ての作品は全体を形成しその全体の中心に作家の精神があって、その精神こそ作品を一つの統一体にする根本であると言っている。文体研究者は「直観」によって作品の中に入る。この「直観」は Spitzer の方法の中で一番問題になる点であると思うが、とにかく彼は「直観」を

¹ 同じ意味の事が Gibbon によって 'Style is the image of character.' と言われたし、古くは Socrates の 'As a man is, so is his speech.' にさかのぼる事ができる。Cf. *Style* by F. L. Lucas, pp. 49-50, n.

助けとする。この直感は、「才能と経験と信念」¹によって研究者が身につけるものでありこれが正しいかどうかは作品をしらべている中に何かふれあうものがあるから分ると彼は述べている。My “circular method” is, in fact, nothing but an expansion of the common practice of “reading books”² と云っている様に、作品をよく読み作家と合一する事が先ず大事な手順なのである。

この様に、具体的な作品を出発点として彼が行った事は必ずしも非科学的とは言えないし、今の文体研究者にとっても学ぶ所は多い。しかし土台にした作品から離れて、研究者の直感に支配される所が多く、心理面を強張りすぎている様に思われる。この印象主義的でどちらかと云えば文芸批評に近い文体研究法に対して、言語学者はもっと客観性を具えた詳細な分析から成る文体理論を打ち立てようとする。そして Linguistics の発達にともない、文体研究は、鑑賞を目的とする美的で主観的な要素を多く含んだものから、資料を厳密に記述する事により言語の文体的特徴を引き出すような方向へと向う。それでは主観的だったものに客観性を与えようとする文体研究は、どの様に文体を定義し又どの様な方法をとっているのだろうか。

§. Linguistics に於ける関心の拡大

ここ数年来 Linguists による文学作品に対する議論は、言語学的方法をどの程度文学作品に応用できるかという問題への関心を深め、その方面の論文も幾つか発表されている。³ 文学の世界は言語を媒介として創られたにせよ、深遠な芸術の世界で、最近の言語学のようにむやみに記号や数式

¹ Spitzer: *Linguistics and Literary History*, New York, pp. 26-27.

² *Linguistics and Literary History*, p. 38.

³ 例えば A. A. Hill, 'An Analysis of the Windhover: An Experiment in Structural Method,' *PMLA* 70, 1955, 968-78; Seymour Chatman, 'Robert Frost's "Mowing": An Inquiry into Prosodic Structure,' *Kenyon Review*, XVIII, 1956, 421-31; McIntosh, 'As You Like It: A Grammatical Clue to Character,' *Review of English Literature*, IV, 2, 1963; S. R. Levin, *Linguistic Structures in Poetry*, *Janua Linguarum*, XXIII (The Hague, 1962).

や統計を使うような人間不在になってきている分野では到底おしはかる事は不可能であるといわれるかもしれない。確に今世紀に入ってから構造言語学の発展にはめざましいものがあり、ますます専門的な方向を辿っている。そしてその結果構造言語学はあまりにも科学的な精密さを要求し、使われる用語は難解を極めると云われてきている。文学研究と言語学の距離はかなり遠くなり、文学者には、言語学はすべて主観的印象的なものを軽蔑するという偏見を植えつけているようである。文学の世界ははかりしれない芸術の世界である。しかしどんなに深遠な思想があっても、或は到底はかる事ができないような美の世界があったとしても Sayce が言う様に¹ 言語という手段を用いて伝達されるのであり、もし言語で捕える事ができないのならどこで他の芸術(音楽、絵画、彫刻等)と区別するのであろうか。文学を芸術と解しても、それは言語による芸術に他ならない。

構造言語学の文学作品への応用、という場合の構造言語学という言葉も、今日では随分輪郭が拡がってきているようだ。言語学にたづさわる者は或る大枠の言語理論においては一致している。例えば言語は変化していくものである事や構造上の型をもっていて分析可能であるという事である。しかし細部になると必ずしも一致しているとは限らない。言語学にたづさわる者といっても様々で、音声を研究する音声学者もいれば、文法学者もいるし、方言を研究する者もあるだろうし辞書編纂にたづさわる者等いろいろいる。更に大きな視野にたつと構造言語学という分野についても似たような事が言える。果してそれは自然科学に属するのか、或は人文学であらうか。ここ数年来の 数多くの研究書には、「構造言語学と〇〇」といった種類のものがかなり目につき、構造言語学と最も関係の深い学問領域は、心理学なのか、哲学なのか、社会学なのか、或は文芸批評なのか考えさせられる。この様に言語学が多岐にわたる問題をもっている事を考える時、ただ現在の言語学は科学的になりすぎた人間不在の学問であるという様な簡単な結

¹ We are conscious of literary experiences which appear to transcend language : plot, character, personality, form in another sense Yet all these experiences are communicated by linguistic means. This is the paradox with which we are confronted. R. A. Sayce, 'Literature and Language,' *Essays in Criticism*, VII, 2.

論を下すのは、あまりにも早急のように思われる。

先に述べた様に、最近、文学作品における表現形式も含めた構造言語学的文体研究が盛んになってきた。言語学と文学の間に道を通そうとする者は文体こそ言語学と文芸批評が会う所であると主張する。しかし両者が向いあって進んだとしても、果して道の真中で出会い、そこが文体であるかどうか疑問である。言語学において文体というのはあくまでも与えられた資料の言語構造の検討である。文学者は資料を通して資料の奥の問題を研究対象にするのであり、それは言語学が終った所から始まるとも云える。そうすると両者は全く異った問題を扱うのであり、道の真中でばったり出会う事はある得ない。言語学的方法を文学作品に応用するというのは、あくまでもそれぞれの状況の中で言語がどの様に使われているかを調べるのであり、その言語表現の分析が文学作品の解釈の助けになる事はあっても、それが作品解釈の凡てであるという意味でない。

言語分析において書かれたものを検討するという事は、言語学の対象が広がってきている事を示している。最初 19 世紀の言語学者は書かれた言語を研究の対象としていた。それに対して、書き言葉より話し言葉を重要視し、話し言葉こそ言語の根本の形であるという理論をかかげたアメリカの言語学者がその対象を口頭の文学から書かれた文学へと逆転しているわけである。又同時に言語理論に関してもどんどん巾の広がりを見せてきている。

1952 年に Zellig Harris は ‘Discourse Analysis’¹ を発表した。この中で彼は Discourse (談話) とよばれる文以上のかたまりを分析する方法として文と文をつなぎ合せている構成要素の分布に興味を向けている。この分布中心の考え方は言語研究と Bloomfield の “physicalism”² を結ぶ役割をはたした。³ Discourse Analysis の基盤をなした分布という考えは、以前は文を単位として検討されていた問題を、文より大きな単位で分析する道をひらき、言語の中心問題に新しい洞察を与えた。

¹ *Language* 28, pp. 1-30.

² 「言語の分析、記述を行うさい空間的、時間的な規定が可能であるような具体的事物に還元できる用語だけを使用するという態度をさす」新言語学の解説。p. 22.

³ *Ibid.*, p. 57.

今構造言語学は形式を規定する方向に進んでいると言ってよいであろう。変形理論の創始者である Noam Chomsky の ‘degree of grammaticality’ も、特殊な構造の多い詩の文体研究の上で役に立つ記述である。Saporta はこの grammaticality に関して “The Application of Linguistics to the Study of Poetic Language”¹ に次の様な例を示している。“The boy fears the night” という文は “The night fears the boy” より文法にかなない同様に “The night frightens the boy” という文の方が “The boy frightens the night” よりも英語にかなう文であるが、これらの文を文法的なものの度合によって調べてみると、文法的な度合の低い表現が詩に多く用いられると考える事が出来るのではないだろうかという。つまり “The night fears the boy” とか “The trees whisper” 等という表現は何よりも詩に起り得る可能性が多いという。Chomsky の述べている ‘Colorless green ideas sleep furiously’ 等は文学以外の文章よりは文学の中に起り得るから、彼は文学表現の面まで入りこんでいると云えない事もない。一方イギリスでは、最近 Halliday 等を中心として文学に於ける文体分析に適用できる表現形式として語彙や語の配置等の研究が盛である。

§. 文体の定義のさまざま

構造言語学が今形式を規定する方向に向っている事を極く簡単に述べたが、言語学者によって試みられている文体研究を紹介する前に一体文体とは何か、という問題を考えてみよう。文体の定義はその研究者の数に等しいと言われる位その数は多く、又その定義の一つ一つに対して研究方法が与えられるわけだからその数もおびただしい。Murry も「文体という言葉に対する議論は少しでも科学的厳密さでなされたとしたら、6冊の本でも十分に述べつくす事はできない」² と云っている。沢山ある定義の中にはかなり重なっているものもあるので、その中の主な考え方を取り出して共通の尺度を見出す事により文体の概念について考えてみたい。

¹ Thomas A. Sebeok, ed., *Style in Language*, MIT, 1960, pp. 82-93.

² F. Middleton Murry, *The Problem of Style*, Oxford, 1922, p. 3.

まず文体を個人に属する特質或は個性に関するものとし、文学作品を研究対象とする考え方がある。実際今迄は文体とは個人研究以外にあり得ないものであるかのように、文学作品にあらわれた個々の作家の文体研究が行われた。それはその作品特有の言語の特質を出発点として、作品の批評に向っていて、たとえ出発は言語であってもやがて言語をこえて批評の領域に入る。

日常の言葉使いを観察するだけでも定ったことばの使い方があるし、ある特定の人の特徴がある事に気がつく。又ある作家に精通している読者ならば文章を読んだだけでもその作者をいい当てる事ができる位、個性の強い作家もいる。私達はふだんこの様な事に何気なく気がついているので、一見すると個人の文体を把握する事は比較的容易である様にみえる。しかし個人の文体といった場合、問題はどのようにしてそれが個人の文体であると定める事ができるかという事である。個人独特の文体という場合、個人に対して集団で共通に使っている文体とどこで区別するかという問題があるわけだ。

Having a style means that in the midst of the language shared with others one speaks a particular, unique and inimitable dialect, which is at the same time everybody's language and the language of a single individual.¹

こうなると一見容易にみえた個人文体も、個人は自分だけのことばを話すと同時に、ある集団に共通のことばも話すという二重性が、個人文体の認識を困難にする。ある表現目的を実現させるために、普通の言語形式の中から特別の形式や言葉を選んで用いる時の個性的な用い方が個人の文体である。この様にして見出された個人文体が、その個人特有のものか又は一般的なものかを見分けるためには、特別なものを見出すために比較対照できる一般的な形式が必要であり、その一般的規範から作家の文体がどの様に違っているかを見極めた上でなければ、個人特有の文体ときめる事はできない。

個人文体は一般の中から特殊なものを取り出すわけであるが、この一般

¹ Nils Erik Enkvist, "On Defining Style," *Linguistics and Style*, Oxford, p. 21.

性と特殊性の関係を一般表現と特殊表現の関係におきかえると、文体とは思考又は表現に付け加えられたものという考え方がある。作家の場合の文体とは、一般的なものに何か特殊な表現効果をもたらすものが加わったものである。加えられるというのは加えられない場合が当然起り得るのであり、何の文体もない文章もできる事になり、文体は名文或は芸術作品のみが持っている特徴となってしまう。

この定義でも、文体は個人特有のものであるという定義と同じ様な問題にぶつかる。つまり加えられる前の思考或は表現というのは何かという事である。私達が手がかりとするものはでき上がった作品しかなく、主観的にならずして作者のもとの思考をどうしたら掴みとる事が出来るだろうか。ここに於いても思考と加えられたものとの間の線をどの様にして引くかという、とてもすぐには解決されない様な問題にぶつかる。

次に文体とは個人独得のものであり、更に個人という意味を作家に限定すると、作家のみが創造する事が可能な効果的な表現形式となり、角度をあかえれば、個人文体とは何か一般的な規準あるいは規範から逸脱した特殊なケースであるという考えを導く。

Style, in the linguistic sense, usually signifies every special usage clearly contrasted against the general. More closely, style could be defined as that way of presenting a subject which differs more or less from the average and which is motivated by the character of the subject, the purpose of the presentation, the reader's qualification and the writer's personality.¹

しかし前に集団によって使われている文体から個人特有の文体を引き出す操作の困難さ、又文体のない普通の文からある文体を区別する困難さがあった様に、ここでも私達は同じ種類の問題にぶつかる。一番大事な事は如何に規範を設定するかという事である。凡ての場合に応用できる様な規範を作る事ができれば、この定義は便利である。或る種の規範からの逸脱はかなりはっきり設定される。時代、ジャンル、或は方言等のように言語内で起る言語現象を分類して使ってもよいし、社会的状況(たとえば、誰から誰に話しているという様な言語外の状況)から逸脱をきめる事でも

¹ Ibid., p. 23.

きる。¹

しかし分析しようとする資料に意味のある背景を与えるような規範をたてなければ、逸脱という定義も役に立たない。

さて規範からの逸脱という考え方は規範を考える前に逸脱を考えるという点で消極的な見方であるが、もっと積極的な点からみると文体は表現の可能性の選択であるという定義になる。そしてこの文体＝選択という考え方が、文体の定義の中で最も普通に考えられているもののようである。文体を規範からの逸脱とする定義と比較して考えるなら、逸脱は選択から起るという事が出きる。例を上げると、かりに John Smith の父親が死んだと仮定すると、その息子は、次の四つの表現の何れかを選んで友人に知らせるかもしれない。

(1) My beloved parent has joined the heavenly choir.

(2) My dear father has passed away.

(3) My father has died.

(4) My old man has kicked the bucket.²

又 Enkvist はエディンバラのホテルで、室内暖房装置の所に “SHILLINGS ONLY” と書いてあるものと “Visitors are respectfully informed that the coin required for this meter is 1/-. No other coin is suitable.” と記してあるのを紹介している。これらの例を較べても分るように、文体の選択とは一見すると、大体同じ意味を伝えるものの間の選択である。そして文体を逸脱と考えた場合には規範にさかのぼって検討しなければならなかったが、選択とする場合、実際の資料は選択結果とみなされるから、一つ操作がはぶかれるように思える。

¹ Charles E. Osgood は ‘Some Effects of Motivation on Style of Encoding’ で、状況から起こる逸脱と個人的な逸脱を区別しなければならないと言う。“Writing a textbook or a poem, talking on the telephone or to one’s little children, as situations, produce certain predictable deviations from the over-all norm. Some students of style will be interested in such situational derivations. But in any situation of encoding, individuals will still display variations about the new, situational norm, and other students of style are interested in such individual variations.—Sebeok, *op. cit.*, p. 293. 同じように、種々の異った段階の状況を G. N. Leech は institutional delicacy と名づけて更にくわしく説明している。(Linguistics and the Figures of Rhetoric, p. 138.)

² A. Warner, *A Short Guide to English Style*.

Good style, it seems, consists in choosing the appropriate symbolization of the experience you wish to convey, from among a number of words whose meaning-area is roughly, but only roughly the same (by saying *cat*, for example, rather than *pussy*)¹

さて言語に於ける基本的な選択はどんな段階で考えられるだろうか。Enkvist は次の様な段階を提案している。(1) 文法的な段階、この段階では言語構造の記述に合わないものははずされ、文として成立するかしないかの一番根本的な問題である。(2) ‘Non-Stylistic Choice’、これは異なる意味をもつものの間の選択で、例えば、They have just returned from a trip to Mexico か They have not returned from a trip from Mexico の間の選択で両者とも英語の構文にかなう場合である。(3) ‘Stylistic Choice’、What sort of man is so and so? という問に対して (Oh, I think) “he is a nice man” 又は “he is a nice chap” という間の選択で、文法にもかない言及する意味も大体同じ場合である。この種の選択は、語ばかりでなく言語の凡ての段階で考えられる。即ち音素、(singing/singin’), 形態素 (leads, leadeth), phrase, clause (in my childhood, when I was a child), sentence (In my childhood I loved to watch trains go by. When I was a child, I loved watching trains go by) 或はそれより大きな単位でも起り得る。言語一般で考えた場合にこの様な三段階の選択が考えられるが、実際問題としては、(2)と(3)との間に境界線を引く事はむづかしい。

選択という基準は、書き手の側からは同じ意味をもつものの間の選択であり、読者の側からは、大体同じ意味である様なものを察するという意味分野に入り込み、資料に表われた項目が起り得るありとあらゆる可能な状況を考えなければならない。又異った構文によって伝えられる大体同じ意味の範囲は どこ迄かという問題も出る。それだから言語一般という大きな枠内では到底「選択」もはっきりしたきめ手とはならない。しかしことばは文脈の中におかれて始めて生きた意味をもつものであるから、資

¹ N. E. Enkvist, *op. cit.*, p. 19.

料にあらわれた言語現象が起る文脈の中で考えられるべきである。この“context of situation”の考えは、ポーランド生れの人類学者 Malinowski が 1914 年から 1916 年の間メラネシヤ地方に民族調査にいき原始民の中に入って自分も共に生活してみても始めて彼等の言葉が分る様になったという経験からでたものである。文体を文脈上の選択とすると範囲は大部限定される。ここでもう一度選択という過程を考えると、A という文脈の中に書き手と聞き手を想定すると、或る動機によって書き手はメッセージを相手に伝えたい。このメッセージは、その言語構造にかなう型でかつ A という文脈に非常に適当な文体で相手に伝わる。選択というのは、この時 A という文脈に最も適当なものを選ぶ時の段階を意味するわけである。

この選択の考え方を前に述べた個人文体にあてはめると、作家は一般的文体の形式以上に個々の語を選択し、配列して文章を構成して作品を完成するのである。文体の個性は言語表現に関するものであり、一般的文体をこえて作家自身の文体を創造するところにある。もし作家が一般的形式を越える事が出きないのなら、その作品は言語によって創られる芸術性には欠ける事になる。勿論この問題は作家のみでなく作品を判断する読者にも課せられている問題でもある。

数多く云われている文体の定義の主なものをあげてみたが、結局これらの定義は文体を少しずつ違った角度から眺めた結果おきた違いであり、これは何も文体に限らずどんなものでも目の位置をかえれば、同じ様には見えないものである。主体に焦点を合せて文体の選択を考えるとそれは個人独特のものになり、選択結果という角度から眺めると規範からの逸脱であり、選択そのものの行為に焦点を合せると、文体とは選択であるという事になる。

§. 文体¹ 研究の方法

(I) Style marker の発見

¹ ここにおいて、文体は文学作品を特に対象としない。形式に表われた所だけから文学と非文学の区別をする事は困難である。どんな言語でも調査可能な言語形態をもつという前提で始める。

文体は文脈上の選択であるという時、私達が検討しようとする資料は選ばれた結果として生じたものであるから、文体は何から何を選択したのであろうかという推定の操作がどうしても入る。選択の結果生じた資料を研究の対象としてそれに至る迄の心理的過程や、推定をさけるために、選択の結果生じた文体は、いいかえれば読者によって認識される Style Marker¹の集合であるとして、さし当っての目標は、資料そのものが分析できる様に選択の角度をずらして考える。

Style marker というのは文体を作る共通な特徴となるのである。文体というのは、ある数の style marker が作り出す構造であり、作品或は資料は、一つの統一体であるから、緊密な文脈でつながっている。Style marker はその文脈の中では欠く事ができないもので、それがなくなると文がくずれる様な働きをするものである。ある文は style marker を多く含み、又或る文は少ししか含んでいないという事もある。Style marker でない要素は、即ちその文脈に存在しなくてもよい様なものを neutral² であるという。³ Style marker は、ある項目がある内容に於いてある使われ方をしたために、その文章を他の文章から特徴あるものにするわけであるから頻度の問題にも関係し、統計的な方法でも見出される。例えば受動態の頻度や、名詞をより多く使う文章と動詞をより多く使う文章に於ける名詞と動詞、或は形容詞や副詞等も style marker と考えられる。この様な選択は、何れかの形の方がよりよく内容にあうのなら、それは文体的な選択が行われたのであり、もはや文法の問題ではない。それであるからこそ

¹ *Ibid.*, p. 34. 小林英夫は「文体論入門」、三省堂、1966, p. 14 で文体素という言葉を使っているが、音素、形態素等に使われている「素」と混同しやすいのでここでは 'style marker' と Enkvist が名づけた通りに使う。

² *Ibid.*, p. 34.

³ Werner Winter は、同じ意味の事を 'Styles as Dialects' で次のように述べている。'A style may be said to be characterized by a pattern of recurrent selection from the inventory of optional features of a language. Various types of selection can be found: complete exclusion of an optional element, obligatory inclusion of a feature optional elsewhere, varying degrees of inclusion of a specific variant without complete elimination of competing features. *Proceedings of the Ninth International Congress of Linguistics*, Cambridge, Mass., 1962, p. 314.

冒険物語の作者は活発な能動態を使い、科学者は受動態を使う事によって自己を消そうとする等と云われるのである。文章の長さ、文章の複雑さ、言葉の長さ等も統計的方法から得た style marker になり得る。

一つの資料の中に表れた style marker はその資料の文体特徴を作り出す。Enkvist はこれを stylistic set と名づけている。同じような文脈をもった資料が集まれば、一つの大きな文脈の中で起りうる更に大きな文体特徴を作る。文体素というものが観念的に分ってもそれをどの様にして発見するかは、むずかしい問題である。Spitzer, が言うようにただ“read and reread”¹ では方法にならない。小林英夫は文体論入門で style marker 発見の調査分野を次の様に設定している。(1)「構成論」：ここではテーマが資料全体にどの様に配置されているかをみる。(2)「テーマ論」：これは一つの作品に表われた全面的な主題ばかりでなく、部分的な主題の選び方をみたり、又文学作品ならば、ある作家の作品全般にみられる主題の共通性なども調べる事ができる。(3)「文間文法論」：長い文章をまとめた幾つかの区分に仕切って考えた場合意味の上でどの様に関係し合っているかつまり Although the roads were slippery, I had no trouble coming home だとすると主節と従属文との意味の関係に合せてどの様な接続詞が使われているかを調べる。(4)「構文論」：文章の型や文の長さを調べ、(5)品詞論で動詞を多く使う作家と名詞を多く使う作家、或はどの様なタイプのものが動詞を多く使ったり或は名詞を多く使うかという問題である。² (6)の語彙論では、感覚語、抽象語、或いは、作者が特に好んで使う様な語の調査をする。(7)は形容詞という項目で用いられている比喻の性質や頻度を調べる。(8)のリズム論では 散文にもリズムがありしかもそれは重要な文体素をなすという。文学の本質は音の要素に関連があるから、書かれたことばにも凡て音声的な含みがある事は確だ。書かれたものの中でも特に詩や劇は音声の存在を意識して創られたのであろうし、韻律に関する分析は大部されている。(cf. Seymour Chatman :

¹ Leo Spitzer, *op. cit.*, p. 27.

² 波多野完治、「文章心理学」に相当くわしい分析が試みられている。

“Metrical Styles,” *Style in Lang.*, pp. 149-172 他可成論文がある。)しかし散文となると単位も大きくなるためカリズムの研究法は殆ど手がつけられていない様である。散文のリズムについては、文芸批評的な立場で書かれたドブレーやリードの文体論ですでに扱われている。¹ Read は散文のリズムについて次の様に云っている。

Though the sentence is the unit of rhythm, it is not the whole of rhythm. Rhythm, . . . is an affair of the paragraph, and rhythmically the sentence is subordinate to the paragraph. . . .

In a sentence the rhythm keeps close to the inner necessities of expression; it is determined in the act of creation. It is the natural modulation of the single cry.²

彼は又 Joseph Conrad や George Santayana のような外国人のパラグラフのリズムは英語らしくなく、Emerson の場合は格言体の文章に氣をとられてパラグラフのリズムを無視しているという面白い観察をしているが、³ これらは、皆リズムの印象批評にすぎない。この分野ではまだまだなされるべきことが山程ありそうである。(9) 番目にあげられているのは「描写技法論」だが、ここでは描写と記述がどの様に使い分けられていて、一方から他の一方へどの様に移り変っていくかを観察する。最後は「描写角度論」で作者はその作品を書く時にどの様な位置をしめているかという事をみるのである。

これ等の“文体素”を見出すための手順は、文学作品の文体分析を目的としてたてられたものであるから文学作品に限らず書かれたものを対象として“文体素”発見のためにこれらの文を調査すれば、ある種のもの、例えば新聞の記事とか科学の本等では、文体素を全く持たない文もでてくるであろう。何れにしても実際の資料にあたって調べる事が先決問題となった。

(2) 文法論の文体研究への応用

すでに述べたように、最近言語学は興味を音韻論や形態素の分析から文

¹ B. Dobrée: *Modern Prose Style*, Oxford, 1934. Herbert Read: *English Prose Style*, 1928, London, 1952 new ed.

² Read, *English Prose Style*, p. 51

³ *Loc. cit.*

法へと移し、A. A. Hill の “Windhover” の分析にみられる様に、文体研究の分析に各々異った文法分析を試みている。John Spencer と Michael Gregory は “An Approach to the Study of Style” に於いて一般表現の文体論の一つの研究方法を示している。ここには Firth を始め M. A. K. Halliday, McIntosh 等の過去 20 年間のイギリス言語学で、文体研究に応用できる理論と方法が集約されてあるので極めて簡単に紹介する。

イギリスでは文法の分野には文法理論とそれに基づいてなされた実際の記述との関係が研究されてきた。Halliday は凡ての言語を作っている文法の基本的パターンに unit, structure, class, system¹ の四つの分類を仮定して、その四種類にもとずいて記述の分類もできると仮定した。ここでは言語は行動であり一つの項目から次の項目へと鎖でつながっていて、ことばを使用するものはその連鎖作用の中で或る項目を他の項目から選び出すのである。Unit は意味のあるパターンを作っている言語の一かたまりで、structure はそのパターンが持っている特徴であり、この二つは言語の chain aspect (次から次へとつながる連鎖状態)を説明する。これに対して、class はパターンの中での言語の項目の選び方であり、system はパターンの中の特定の箇所の選択の可能性を指し、両者とも言語の choice aspect (A より B) とされる。そしてこの四段階の分類は、rank, delicacy, exponents² という抽象のスケールでつながれ、文体分析にも応用する事ができる。scale of rank は sentence, clause, group, word, morpheme と単位の大きなものから小さなものへの段階からなる。この単位で文章を考えると、一つの文は、一つ或はそれ以上の節、一つ又はそれ以上のグループ、一語或はそれ以上の語、一つ又はそれ以上の形態素とから成り立つ。この様に幾つかの単位が一つになって他の単位の構造の中に入って行き言語構造は直線的に続くばかりでなく深さもある事を示している。この序列の段階によって私達は資料に表われた構造の複雑さを分析して考える事ができるし、又

¹ An Approach to the Study of Style, p. 76.

² Ibid., p. 78.

色々な種類の資料にみられる構文上の類似や相異を記述する事ができる。さて序列の段階と同様に資料の構造を調べるのに役に立つ‘delicacy’は相異の段階のことで、つまり最も‘delicate’でない記述というのは、最も少ない単位からなる簡単な構文で、たとえば、H(head), M(modifier)とQ(qualifier)から成っているような文である。Exponenceの段階は、理論の範疇とデータを結びつける高度に抽象的なものである。そこでは非常に細かい分析に基いた文法によって資料の形式が検討される。そこから先は語彙に関する分野に入ると考えられていたのだが形式に関する叙述が文法で終らなければならない理由もなく Halliday は‘Theory of Lexis’をたてて、語彙の形式の叙述のための理論的範疇として collocation と set¹を提案する。Collocation は言語の中の或る項目が非常に似た状況で起る事から考えられたものである。例えば“economy”という言葉なら同じ様な言語状況‘affairs,’‘policy,’‘plan,’‘programme,’‘disaster,’²等かなり長いリストができる。この場合‘economy’という言葉のもとに集められた一連のことばを全部ひっくるめて set と呼ぶ。³この考え方はまだ新しいので、配列によって形式的に定められた‘set’よりはまだまだ意味によって分類される方が多い。しかし、文法等では明らかにされない、言語に見られる「連鎖」と「選択」という考え方を紹介した点で大いに意味がある。

さて資料に於けることばの詳細な記述が終わったら今度はその言語を言語一般との関係に於いて調べる。先に言語一般と較べるのはあまりに枠が大き過ぎるという事を述べたが、ここで著者は幾つかの方法を示している。まず歴史的に資料を観察する。ある時代の言語にみられる様々な特徴は必ず他の時代とは違っているし、言語は徐々に変化しているものなら、書き手は、ことばや構造を選ぶのに必ずその影響をどこかで受けている筈だからである。次に資料に使われている dialect を調べる。劇や小説等は或る

¹ *Ibid.*, p. 73.

² *Ibid.*, p. 73.

³ Collocation の説明は、cf. J. C. Catford: *A Linguistic Theory of Translation*, pp. 10-11.

目的で特殊の方言を使いある効果をおさめている場合が多いから、標準語の使用によって方言の差はあまりみられなくなっているとは云っても見逃してはならない。次は主題との関係によって生ずる語法の特徴、即ち著者が ‘field of discourse’¹ とよんでいるもの、書き言葉と話し言葉の違い、‘mode of discourse’ 及び書き手と読者の関係から起る形式の度合で ‘Tenor of discourse’ である。これら三つは、ばらばらに切りはなせるものではなく、ある時は混然とまじり合っている。

作品の内的及び外的な脈絡の明確化は言語学に欠く事ができない重要な要素である。前に述べた様に Malinowski によって紹介された ‘concept of situation’ の概念はイギリスの言語学者の間では重要なものだった。Firth は 1950 年に次の様に書いている。

My view was, and still is that ‘concept of situation’ is best used as a suitable schematic construct to apply to language events, and that it is a group of related categories at a different level from grammatical categories but rather of the same abstract nature. A context of situation for linguistic work brings into relation the following categories :

- A. The relevant features of participants : persons, personalities.
 - (i) The verbal action of the participants.
 - (ii) The non-verbal action of the participants.
- B. The relevant objects.
- C. The effect of the verbal action.²

資料外の脈絡は資料を複雑な社会機構の中の一部の発話と考えた時に調べられる。つまり資料がかかれた時の個人的、社会的、言語的、又思想的な状況を検討する。これは資料を言語一般と比較した時にも出る問題である。同時に資料内で起っている状況の脈絡にも注意を払わなければならない。そして一つの資料が明らかになったら、それを他の資料と比較研究する。この様な資料が多ければ多い程、資料を通しての文体研究から、抽象的で定義することが困難な “文体” に何か具体的な reference を与えることができるのではないだろうか。

¹ *Ibid.*, p. 86.

² J. R. Firth : *Papers in Linguistics 1934-1951*, London, 1957, p. 182.

(3) 統計による文体研究の試み

style maker の発見の手順にしても、他の場合でも統計的方法も大切なものであるので、最初に統計的方法で実際の資料分析を試みた例を検討してみる。

John B. Carroll は散文の文体を作る基本的な次元を設定しようとして、心理学者 Thurstone の ‘factor analysis’¹ を文学のスタイル研究に適用させてみた。² ‘Factor analysis’ というのは、ある現象にあらわれる色々な変化にあてはめられる様な基本的な次元を統計的な方法で設定するのである。心理学では、知能、人格、感情などを計るのにこの方法を用いているが、もし人格がこれによって計れるのなら、散文の特徴に関しても何らかの示唆を得る事が出来る筈であるという推定に立つ。一体文体にさまざまな相異をもたらすのはどのような要素なのであろうか。いいかえれば散文の文体を決定する基本的な次元とは何か。

Carroll はこの実験のために 300 語内外のまとまった内容をもつ英語の小説、随筆、新聞、伝記、科学論文、教科書、スピーチ、手紙、説教、公文書の中から 150 の抜粋を選び、それ等を主観的なはかりと客観的なはかりにかけてみた。客観的な方法というのは、言葉、節、文等の統計的な計算で、主観的な方法としては、8 人の文学者によって 29 項目からなる形容詞の段階にしたがって 150 の抜粋が採点された。その結果次の六つが散文の根本的な次元と定められる。³ (1) general stylistic evaluation (2) personal affect (3) ornamentation (4) abstractness (5) seriousness (6) characterization-narration⁴。8 人の文学者の間で全体の評価に関しては一致がみられず、機械的には評価はあまりできない事を示している。(2) の personal affect では人称代名詞の数や音節を数えて、又個人的な

¹ Charles E. Osgood, George J. Suci, Percy H. Tannenbaum: “The Dimensionality of the Semantic Space,” *The Measurement of Meaning*, Urbana 1957, pp. 31-75.

² John B. Carroll: “Vectors of Prose Style,” *Style in Language*, pp. 283-292.

³ 詳しい操作とその結果は表になっている。 *Ibid.*, pp. 286-7.

⁴ *Ibid.*, pp. 288-290.

言及或は感情的な言葉をどの程度使うかという問題で、三番目の ornamentation では形容詞や分詞によって修飾された普通名詞が多く、その他従属文や叙述形容詞の数が多い傾向がある。次の abstractness では数の表現が少く、this とか each とか代名詞は少いが名詞節が多く分詞の数が少い。serious な型の文では不定冠詞が少く、限定語或は句の数が多い。Characterization では、他動詞が少く、linking verb が他の動詞より多い。又固有名詞の数が少く形容詞節が多く自動詞も多い。これ等が多いのは性格描写を目的とし、逆にこれ等の要素が少いのは人間の動作を伝えたりして、他動詞と固有名詞が多くなる。

先に文体をみるのに style marker の分布を調べる事を述べたが、この factor analysis は散文の中にある様々な要素の中でどのような要素にまとめられるかを見出すものである。これによって私達は直接文体にとってそんなに重要でない要素迄一つずつ検討するという操作をはぶかれる。しかし果してここに出た六つの次元は文体を扱う場合の基本になるものであろうか。何だか文の内容とこん然一体となった感じでもあり、文体と内容の線をどこに引く事ができるか判然としない。もともと内容と文体はきってもきれない関係にあるが、分析のためには基本線をどこかに設定しなければならない。この実験で面白い点は客観的データと主観的データの両方を組合わせて調べた事であるが、よい文体とそうでない文体という評価に関しては何の客観性も得られず、文体という種々の要素がまじり合ったものに共通の分母を求める事のむずかしさを示している。

Factor Analysis は結果に導く迄かなり複雑な手順があるが、Werner Winter は非常に簡単な統計的方法で文体分析を試みた。¹ 統計的データを得るためには数多く試みられなければならないし、又そのためには手順は単純でなければならない。Winter は言葉の長さ(音素による長さでなく字による長さ)を計って文体分析をおこなっている。まず9つ或はそれ以上の字から成る言葉の分布を調べる。(但しこの場合 finite verb は必修条

¹ W. Witner, "Style as Dialects," pp. 324-330.

件で使われるので、文体のきめてとしては不向きとして除いている。) 最近 2 世紀にわたる作家の 1000 語からなっている 50 の異った資料を選び出しており、この中には会話を含んだ資料も入っている。50 の例の中新聞雑誌等からの 20 の例に於いて 9 字以上から成る“長い言葉”が 15% 以上の相対頻度をもってみられ、30 の例に於いては、9% 以下でそれ等はすべて対話を含んだ抜粋であった。そして議論的な散文を対話と区別するには長い言葉を使用できるのではないか、云いかえるなら長い言葉の頻度の少いものは対話の特徴であるといっている。彼は又 30 の異なる資料の中から 63,093 の文章を選び一つの clause の長さも調べてみているが、これらの調査では話し言葉と科学的な文体とが比較されていて、明らかに異なるものを二つもってきて、どこにその違いがあるかを検討するのであり、二つの文体は異なるかということではない。

このような統計によって何らかの規範が立てられるかどうか。もし何か規範を立てる事ができたとしても、それは抽象的な文には会話が少なく、文の長さは大体短く、動詞と形容詞が少いとか、具体的な文には抽象的な名詞が殆どなく形容詞や副詞が多く、文の構造も複雑になる等という大体私達が過去の経験から積み重ねてきて知っているもの、或は直観的に分る程度のものを数量化する事によって証明するにすぎない様である。統計的方法で調べる場合に最も重要な事の一つは、どんな項目を選ぶかという事であり、まだその点では、この方法は未完成である。

このような統計によって得られる要素は、今日一般に文体と考えられているものの極く一部であるに過ぎないが、この方法も確かに文体研究方法の一環をになっているといえよう。何故なら私達の日常生活に於いて偶然的な要素が多いのと同様に、作者の作った作品の中にも偶発的なものがあるに違いないし、その時に統計的方法によって私達は偶然に目をくらまされず必然の姿を捕える事ができると思う。

§. 言語学的文体研究の目標

文体という概念が如何に抽象的で厳密な定義を与える事がむづかしいか

改めて痛感する。文体研究方法も色々の方向から考えられる。文学に表れた言語表現は文化的背景の中での言語様式の問題であるという観点から1958年アメリカで人類学、民族学、言語学、文芸批評、哲学、心理の六つの分野からの代表が文体に関する検討を行ったが、文体は文化的背景から考えると人類学の立場からも研究されるであろうし、stylolinguistics¹（文体の言語学的記述）ならば、資料内の言語分析になるし、stylobehavioristics²では刺激への反応という意味で文芸批評につながり、又実用面からは、作文の教授法にも応用可能である。資料を通して作者の心理的な面を強調して研究するならそれは心理学の分野に入るだろうし隣接領域は実にひろい。しかしLinguisticsでは資料にあらわれた分析に集中して言語構造の特徴を丹念に調べる事が当面の問題である。何度もくり返す事になるが方法は様々あり得る。ここに検討した方法はごく一部に過ぎない。資料の分析は非常にやっかいで面倒な事のように見える。その様にしてなされた事実の発見は文学研究とは何の関係もないかも知れない。しかしLinguisticsによって言語の働きをのべる事が出来る。よく検討された資料と他の資料との比較は文芸批評の極く一部に寄与する事も可能であろう。何れにしても今ここに残された課題は、言語学的文体研究方法を具体的な資料に応用して実際にどんな結果が得られるかという事の試みであり、この一文は、それへの序文のつもりである。

参 考 文 献

- Allen, H. B.: *Readings in Applied English Linguistics* (Part 7), New York, 1958.
Catford, J. C.: *A Linguistic Theory of Translation*, Oxford, 1965.
Charles E. Osgood, George J. Suci, Percy H. Tannenbaum: *The Measurement of Meaning*, Urbana, 1957.
Firth, J. R.: *Papers in Linguistics*, London, 1957.
Fowler, R. (ed.): *Essays on Style and Language*, London, 1966.
Lucas, F. L.: *Style*, London, 1955.
Murry, John Middleton: *The Problem of Style*, Oxford, 1928.

^{1,2} N. E. Enkvist, *op. cit.*, pp. 47-54.

- Read, Sir Herbert: *English Prose Style*, London, 1928.
- Sebeok, T. (ed.): *Style in Language*, Cambridge, Mass, 1960.
- Spencer, J. (ed.): *Linguistics and Style*, Oxford, 1964.
- Spitzer, Leo: *Linguistics and Literary History: Essays in Stylistics*, Princeton, 1948.
- Ullmann, S.: *Language and Style*, Oxford, 1964.
- Lunt, H. G. (ed.): *Proceedings of the Ninth International Congress of Linguistics*,
The Hague, 1964.
- 日本文体論協会編:「文体論入門」、三省堂、1966.
- 宮部菊男:「英語学——テーマと研究(V)」、研究社、1961.
- Harris, Z.: 'Discourse analysis'—*Language* 28, pp. 1-30, 1952.
- McIntosh, A.: 'Patterns and Ranges'—*Language*, 37, pp. 325-27, 1961.
- Riffaterre, M.: 'Criteria for Style Analysis'—*Word*, XV, pp. 154-74, 1959.
- Stutterheim, C.E.P.: 'Modern Stylistics'—*Lingua* I, pp. 410-26, 1948, III, pp.
52-68, 1952.

Résumé

Style and Linguistics

What can linguistics contribute to the study of style?

Setsuko Toyama

Style is a highly complex phenomenon and can be looked at from many different points of view. It is often regarded as the exclusive territory of literary critics and is discussed from an impressionistic or aesthetic point of view which leads to an evaluation of the work. As linguistic science develops, many linguists are concerned with aspects of literary style as it relates to the use of linguistic forms in social and cultural context. Especially, in the last few years the interest in the applicability of linguistics to literary texts has been increased. In order to apply some linguistic techniques to the study of style, various definitions for the term must be first examined to find some common elements among them; the concept is so highly abstract that it seems almost impossible to reach one precise definition. After some concepts are presented, several methods of analysis which are seemingly relevant to the study of style are examined. The procedures introduced here are still incomplete and a large number of actual texts must be analyzed to prove the validity of the methods. The detailed analysis of texts will not destroy their literary value; rather it will help to recognize the scope and variety of the language as a whole.